第３回　基本文型

教科書の該当ページ：８～９ページ、15 ページ

基本文型：主語＋動詞＋補語　→　教科書第１課①、第１課③

「ＡはＢだ」は、主語(A)＋動詞＋補語(B)で表わされます。補語は名詞です。主語と動詞、補語と動詞の関係は格によって表わされます。主語と補語は主格になります。

例）これは花瓶です。	Tämä	on	kukkamalja.
	これ(主格)	動詞	花瓶(主格)

「Ａはどんなだ」は、主語(A)＋動詞＋補語で表わされます。補語は形容詞です。主語と補語は主格になります。

例）それは高価です。	Se	on	kallis.
	それ(主格)	動詞	高価(主格)

疑問文：何・誰・どんな　→　教科書第１課④

「ＡはＢだ」のＢがわからないときは、Ｂを疑問詞にして疑問文を作ります。主語(A)＋動詞＋補語(B)の補語を疑問詞 mikä「何」あるいは kuka「誰」で置き換えて文頭に置きます。主語と動詞の語順は変わりません。

例）これは何ですか？	Mikä	tämä	on?
	何	これ	動詞
これは誰ですか？	Kuka	tämä	on?
	誰	これ	動詞

「Ａはどんなだ」の「どんな」がわからないときは、「どんな」を疑問詞にして疑問文を作ります。主語(A)＋動詞＋補語の補語を疑問詞 millainen「どんな」で置き換えて文頭に置きます。主語と動詞の語順は変わりません。

例）それはどんなですか？	Millainen	se	on?
	どんな	それ	動詞

主語と動詞の一致　→　教科書第２課①

フィンランド語では、主語の人称(１人称・２人称・３人称)と数(単数・複数)に合わせて動詞の形が変わります。上の例では、日本語の「だ」「です」に当たる動詞として on が使われていますが、これは、主語が「これ」や「それ」あるいは「彼」や「彼女」といった３人称単数の時に使われる形で、例えば、主語が「私」のように１人称単数になると、同じ「だ」「です」でも、動詞の形は olen に変わります。

例）彼は学生です。	Hän	on	opiskelija.
	彼(主格)	動詞(３人称単数)	学生(主格)
私は学生です。	Minä	olen	opiskelija.
	私(主格)	動詞(１人称単数)	学生(主格)

修飾語句　→　教科書第１課②

主語や補語として使われる名詞は、修飾語句を使って修飾することができます。修飾語が形容詞の場合、形容詞+名詞の語順になり、形容詞は名詞と同じ格になります。

例）彼は有名な作曲家です。	Hän	on	kuuluisa	säveltäjä.
	彼	動詞	有名な(主格)	作曲家(主格)

一方、「～の」で修飾されている場合は、名詞が主格でも修飾語は属格になります。属格には語尾 -n がつきます。

例）彼は[この歌の]作曲家です。	Hän	on	tämä**n** laulu**n**	säveltäjä.
	彼	動詞	この歌(属格)	作曲家(主格)

ただし、日本語が「～の」となっていても属格にならない場合があるので注意しましょう。次の例の「日本人の」は形容詞なので、「作曲家」と同じ主格になっています。

例）彼は日本人の作曲家です。	Hän	on	japanilainen	säveltäjä.
	彼	動詞	日本人(主格)	作曲家(主格)